令和３年度　鹿児島県アイランドキャンパス事業

与論町の住民の力を活用した「生活の支えあいづくり」活動の構築支援に関する研究

報告書

～地域で生活を続ける～

鹿児島女子短期大学　生活科学科生活福祉専攻
福永　宏子

1． 研究の目的

住み慣れた島の生活を継続できるためには，多くの地域（与論町内）住民が参加する生活支援ネットワークの構築が必要となる．そこで，与論町内各地域の住民に，高齢者や障害者の心身がどのような状態でも，生活は地域で継続させられることを理解してもらい，地域住民が主体となる生活支援ネットワークの構築および関係機関とのネットワーク体制の整備を行っていく．地域での高齢者や障害者の生活の継続が可能になるネットワーク体制の整備により，与論町における地域主導型の生活支援の活動拡大や社会資源の増加を目指す．

今回，学生が与論島での介護の実情や地域での支えあいについて理解を深め，自分たちで「地域における支えあいづくり」に必要な課題や問題点を明らかにし，支援が必要な離島の住民の方々に対しての対応や支えあいの実践が自主的に可能になっていくことを目指す．これらの活動により，与論島内各地域の互助機能の強化も期待できる．

2． 実施時期・内容

	時 期	場所・対象	内 容
①	令和３年８月下旬～10 月上旬	与論町全世帯	アンケート調査
②	令和３年 10 月 29 日	与論町地域福祉センター 住民 社会福祉関係者 学生	情報共有会
③	令和３年 10 月 30 日	与論町地域福祉センター 住民 社会福祉関係者 学生	ワークショップ
④	令和３年 10 月 30 日	与論町地域福祉センター 在宅支援人材育成専門員 学生	インタビュー調査
⑤	令和３年 10 月 31 日	住民宅 町民福祉課担当者	インタビュー調査
⑥	令和４年２月１日	与論町地域福祉センター	アイランドキャンパス報告会

3. 参加者

① アンケート配付数 2,182 世帯　回収数 343 通（回収率 15.7%）
② 鹿児島女子短期大学 教員２名 学生２名　与論町 24 名
③ 鹿児島女子短期大学 教員１名 学生２名　与論町 8 名
④ 鹿児島女子短期大学 教員１名 学生２名　与論町 1 名
⑤ 鹿児島女子短期大学 教員１名 学生２名　与論町 2 名
⑥ 鹿児島女子短期大学 教員１名　与論町 13 名　延べ人数 61 名

4． 実施の方法

（１）情報共有会

＜ねらい＞

① 与論町内にある，公共施設や医療・介護福祉施設を調査することで，社会資源や環境について理解することができる

＜方法＞
・与論町内の福祉サービス事業所からの説明を聞き、現状を理解する
（2）インタビュー調査
＜ねらい＞
① 与論町での生活について、直接住民および在宅支援人材育成専門員と行政担当者から話を聞くことで、「生活のイメージ」をさらに鮮明にする
②多角的な視点で考えることで，そこから持続可能な地域づくりを考えるきっかけづくりをする.
＜所用時間＞
45 分〜60 分程度
＜実際の流れ＞
今の状態の受容過程や思い出すことによって，感情が揺らぐことがあることを想定して，初対面であっても話を始めやすい環境を作ることに努める.
・声のトーン，表情，共感的態度など
・インタビューの間は，録音・録画の同意を得たうえで，確実にできるように準備しておきます.
（3）ワークショップ
＜ねらい＞
① これまでの学修の成果として，その人らしく，地域で生活するためにどのようなことができるかを考え，地域や関係者を共有することができる
② 地域に関係がなくても，その人のことを一生懸命考えることで，新しい発見やつながりをとらえることで，地域に還元できる.
③ 多角的な視点で考えることで，地域の課題を地域資源にかえ，そこから持続可能な地域づくりを考えるきっかけづくりをする.
＜方法＞
①前日の情報交換会での内容を、広幅用紙にまとめる
②発表をしながら、参加者の意見を聞く
③今後の活動の方向性を検討する
（4）アンケート調査
＜ねらい＞
地域で生活している人を対象に介護に関するアンケート調査を行い，介護福祉士が担うべき活動および地域で求められている役割について明らかにすることを目的とする
年齢や障害の有無に関係なく安全に安心した地域生活を可能にする「地域共生社会」の実現に向け，地域の力を高めていくには，地域の社会資源としてのサービスや制度のみならず，住民一人ひとりが介護に関する知識や技術を習得することも重要な社会資源の一つになると考える.

＜方法＞
①与論町役場、与論町社会福祉協議会への協力を依頼し、世帯配布を行う
②調査表は同封の封筒に入れ、直接アンケート実施者へ返信する

③結果から今後の活動の方向性を検討する

5．　取り組みの成果

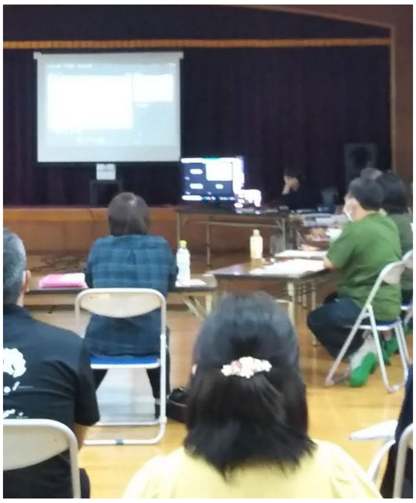
（Ｉ）情報共有会

与論町内にある介護保険制度の居宅系サービスの３事業所、入所系サービス２施設、地域密着型事業所１事業所、障害者支援制度（障害者総合支援法関連事業所）２事業所の関係者から現在の状況やサービスの内容について説明があった。その後、　在宅支援人材育成専門員から１年間で感じた与論町の福祉についての報告があった。

意見として出されたものは、「人材の不足」「人口が減少していく中で新たな事業展開の難しさ」などがあった。

《参加者からの感想》

１　　よかった　１６　　　２　ふつう　　４　　　３　よくなかった　　０



・与論町の現状を知ることができてよかった。

・現状を認識し何が必要か、各所が考え全体で考え住みよい島づくりをして行けるとよいと思います

・各施設の役割と認識することが大事だと感じた。

・各施設が一堂に介す機会は今までになかったんで、定期的に今後研修会を開催されることに関してはどの分野に関しても重要であると感じた

・各事業所の状況、課題が把握でき非常に良かったです

《今度の研修企画など希望すること》

・家族などが認知症ではないが失禁してしまい家族は仕事をしていて世話が大変というのを聞くので、与論の介護サービスやサービスを受ける手順などを聞ける研修会があればと思います

・基本的介護研修から初めて人材育成を進めてほしい。初心者介護研修～段階的研修。障がい者対応研修、スキルアップのための研修

・フレイルの関する内容で、関係機関でそれぞれどのような取り組みをされているのか、そして課題の掘り起こし企画

・人材掘り起こし　各施設共通の課題に関する研修

（2）インタビュー

《住民インタビュー》

与論町の生活がわかる民俗村で、これまでの生活様式や生活の風景を見学しながら行った。

これまでの歴史や、住宅の構造、大島紬などの自宅でできる仕事をしながら生活をしてきたことなどを詳しく説明を受けた。

《在宅支援人材育成専門員》

赴任してこられてからの活動の内容、与論の介護福祉の現状、これからの活動の予定、介護福祉士を目指している自分達への期待などについて説明を受けた。

《町民福祉課担当者》

与論町のよさや、これまでの活動の内容、喜びや苦労などについて説明を受けた

《学生レポートから》

・以前の島での生活の様子や人のかかわりを知ることができた。

・自分たちにはわからない時代の過ごし方ではあるが、家を建てるにも木材を沖縄から運ぶなどとても苦労があったのだと感じた。

・話を聞いた方は「つらい」様子もなくこの歴史を大切にしていきたい気持ちがとても伝わった。

その中で、自宅で介護することと看取ることは、当たり前のことであり、大島紬等家でできることを仕事としていた女性の活躍や子育ての様子等知ることができた。

・人を見送るときの様子をとても詳しく教えていただいたその中で、サービスや社会の変化でこれまでの歴史文化とのバランスが崩れつつある危機感があることがわかった。

（3）ワークショップ

昨日の情報共有会での報告内容を広幅用紙３枚にまとめたものを発表し、意見交換を行いながら課題を整理していく作業を行った。

人材が不足していることがテーマの中心となった。しかし、こどもから高齢者までどの年齢でも命を守る活動の必要性の意見もあった

（4）アンケート調査

地域住民に対し，調査の趣旨を書面で理解していただいた上で３町合計 7,507 世帯へ配布し，合計 1,037 通の回答を得た．回収率は 13.8%となった．

表5　アンケート調査配布数・回収数

	配布世帯数	回収済み	回収率(%)
喜界町	3,507	426	12.1
与論町	2,182	343	15.7
福山町	1,818	268	14.7
計	7,507	1,037	14.2

《家族介護の経験》

・介護者の「体力的」「精神的」な負担に対する回答も多かった．「現在している人」は，相談相手に対して単に身体介護などの介護技術だけでなく，これまでの経験や知識を基にしたアドバイスを求めている。

・現在は介護までは至らない場合でも生活の中で発生したときのために，生活者が「具体的な対応や解決方法を事前に知っておきたい」等の介護に関する興味や関心のある情報を得たい。

《介護に対しての不安》

・介護をするうえで心配・不安なことでは，「排泄（トイレ）や食事，入浴などの方法に関すること」がもっとも多かった．

・「介護が必要になった場合どうするか」では，３町すべてで，「施設や病院で介護サービスを受ける」が多く，次に「自宅で介護サービスを受け，家族に介護してもらう」が多かった．

＊別添報告会資料参照

6.　これからの課題

インタビュー調査では、「一人ひとりが思いや能力を持っている島」であり、「働くことの生きがい、楽しみ、家族や地域での役割、状況に応じた対応ができるのが離島の魅力である」しかし一方で、「家庭が差別偏見を作っている？」と自分の家族は特別であるとの認識で環境や社会に馴染むことの難しさなど閉鎖的な一面もあることがわかった。

住民インタビューでは、サービスや社会の変化でこれまでの歴史文化とのバランスが崩れつつある危機感を持っている。過去の伝承をしながら、住共生していくそれには、住民全体で取り組む必要が明らかとなった。

インタビューを通して、与論町では制度に利用者を合わせるのではなく、必要な人に必要なサービスの提供がなされている柔軟さがあることが分かった。都市部ではできないこの柔軟さは重要である。

情報交換会やワークショップでは、マンパワーの不足があるが住民の居場所、どの年齢でも命を守る活動を始めなければいけないという意識の変容があったと感じた。

アンケート調査では、住民がどのような不安があるか。また介護に関する考えが明らかになった。今回の調査で各町においての差が明らかとなった「介護を受ける場所と最期を迎える場所」「介護に関しての心配・不安なこと」などの項目について，現在の状況をさらに詳しく調査する必要がある．

7.　まとめ

昨年度に続いての実施であったが、今回はアンケート調査によって具体的に与論町の介護に関する課題が明らかとなった。

①以前の与論町の生活様式、大島紬などをはじめ自宅で介護ができる環境が自然にあった中で、社会生活の変化によって難しくなっている。

②これからは、「自助」「互助」を基盤とする一人ひとりの介護に関する知識や能力を高めることで、地域の力はついていくと予測される

③マンパワーの不足が深刻な状況にある。新規事業の拡大はもとより維持の限界も近い危機感がある

④これまでの行政や関係者が、柔軟な対応が出来ていた素晴らしさがある。また思いも持っている住民もたくさんいることが分かった。これからはその具体的方法を示しながら進めていくことが求められる。

参加した学生は、異なった環境での介護福祉のあり方や実際の生活や活動している方の話を直接聞くことが出来、非常に良い経験となった。学生のまとめでは、『離島で生活するということは、非常に生活しづらい部分が多いと感じていた。しかし自然と共存しながら人とのつながりがとてもあり素晴らしいと感じる。しかし、介護のサービスは非常に少なく、利用できないという自由がないことは非常に生活がしづらいことだと思う。今回参加をしていく中で、参加者の方が、「単に事業所を増やすだけでは、長期的にみると利用者がいなくなるかもしれないし、人材も不足しているので簡単に新規事業に手は出せない」と言われていたことにおどろいたと同時に、これまでそのような視点で考えていなかったので、非常に考えさせられた。島に対しての思いを聞きこれからもこの事業に参加したいと強く思った』としている。さらに、学生の「自分たちの当たり前は、環境が異なれば当たり前ではないことがよく分かった」の感想は、この研究の目的「地域づくり」の主体は住民であることをさらに明確にしたと感じる。

これまでの結果を基に次年度は以下の３点を継続的かつ具体的に実施していきたい。

①地域住民の介護活動支援（学習会の開催）

②社会資源の有効活用方法

③身近な相談支援